

能海寛(石峰)と古河勇(老川)の新仏教徒運動

タイトル	能海寛(石峰)と古河勇(老川)の新仏教徒運動
著者名	隅田正三
雑誌名	能海寛研究会機関誌『石峰』
号	第23号
ページ	53-59
発行年	2018.3.15
E-mail	sekihou@hazaway.com (能海寛研究会)

ISSN 1883-4183



中国借姿の能海寛

能海 寛 略歴

能海寛 法名法流。石峰と号す。明治元年5月18日島根県浜田市金城町長田(当時は東谷村)浄蓮寺に生まれる。12歳で得度し、慶応義塾と哲学館に学ぶ。恩師南條文雄師の意思を継ぎチベット探検の論文『世界に於ける佛教徒』を発表すると共に語学の研究と山岳登山による体力の練磨をなす。郷里にあっては地方史を編纂して和歌を詠み、益田沖の高島にて寺小屋を開設する。哲学者、探検家、宗教家として釈迦直伝の大藏經の經典を求め英訳經典世に出す目的で当時銀国中であつたチベットへ求道のため身を挺し仏教巡礼探検を実践した功績は偉大で有言実行と用意周到さは後世に幾多の教訓を残す。その苦難の34年の生涯に「般若心經」西藏文直訳(梵・藏・漢・英)など四巻が著書として永遠に伝う。

能海寛（石峰）と古河勇（老川）の新仏教徒運動

能海寛研究会員 隅田正三

「新仏教徒運動」を推進した能海寛と古河勇の日記やエッセイを辿り交友関係から検証してみたい。古河勇は、二人を称して、蟄龍（地中に潜んでいる竜。時機を得ないで潜んでいる英雄にたとえる。）と予言している。二人とも、中西牛郎の『宗教革命論』に述べる旧仏教徒と新仏教徒の性を区別していることに意を得ている。

能海は、『世界に於ける佛教徒』第4章「哲学上の仏教」において、「仏教は哲学以上に位いせる真正なる信仰の宗教なり、これ哲学上における仏教の位置なり。哲学と仏教の関係容易に論じ尽くし得るべきにあらず。ただ予は、この章に於いては哲学の必要を論じ来たりて、遂に、仏教の位置を定め、仏教の眞理は哲学以上にありて、将来の宗教は哲学上においても、仏教が、宇内一統宗教たるべき資格あることを論ぜるのみ。この懷疑、信仰の二義に就きては、他日、世評を乞わんと浴する所なり。」と世界を見据えた新仏教徒運動を「一統宗教」として「英訳仏典」を世に出そうと考えていたのである。

能海は海外で、古河は国内で、それぞれ新仏教徒運動を「木石書院」において誓い合っただのである。こういった意味合いで、古河の「自炊」と能海の「春秋日記」を付け合わせることによって、二人の信頼関係が伺えるのである。

「自炊」(『青年文学』明治25年3月掲載)

古河勇

かつて、自炊せり。昨秋、偶ま間を得て当時の実況を採り、筆して「自炊」の一編を作る。今楼上巖然、珍味座に満ち婢僕、声に癒して来る、顧みるに大威亡き能はさめなり、以為く貧裡の富、苦中の快、乾坤を一室に縮めて、世を厭はずも天を樂ます、独り宇宙を弄翻してして飲食し起臥せる事、之を遠人に示して、活眼の一顧を乞ふ、快事之に加くあらずと、乃ち旧稿忽然として江湖に顕はる。

記事2つに分る。蓋し前後二回の「自炊」を別々に筆したるなり。思うに前回は当時下宿の敗風に避易し其難を避けんが為め、後回は身寒貧到底下宿楼上の閑臥を貧ほり得ざりしが為なりき。一は此都の南方に於いてし、一は其北方に於いてしたりき、乃ち筆する所、趣亦少しく異なり。憚る所ありて、姓名を変せし者あり。枝末にわたるを以て全く削りし者あり。読者心せよ。

(1) 木石書院

豊岡町の龍源寺と云う。門前あり。北より流れ来りて直ちにまた西に折れる。東南角にあり、川を隔てて廣尾、木村の疏屋、菩提樹に迷うを見るべし。門に入って本堂、左に傍うて小門を入れば2屋あり。南に面して並び立つ。何れも六畳、三畳の2間ほどの家。小庖厨之に付き小雪隠(トイレ)これに添付す。共に人に貸さんとして同寺住職の建てし者、もとより月々の小家賃で晩酌を快飲せんと欲するに過ぎず。天下の二大蟄龍が一春、突然として此処に和会し、或は叫び、その自炊の大経験論を実行して法門千歳の事を定むるあらんとは、余輩の自炊房は、実に、この長屋の西の方なり。

同宿の能海寛は、石峯居士と云う。「放浪の奇人、夙に遠大の希望を抱き、性朴直にして義を好む。」嘗て余(古河)と西都(京都・普通教校)に同学せし者なり。

余（古河）は、木国人（紀伊）。彼（能海）は石州人（石見）此に於いて自炊房を名づけて「木石書院」と云う。

（2）森羅万象

火鉢、銅瓶（湯沸し）、茶器、土瓶（水入れ）、膳、ふた物、茶碗、ゆきひら（飯たき）、銅鍋、手桶。

（3）朝

石（能海）の眼は常に木（古河）に先ちて覚む。先ず起きて戸あく臥床あぐ。石（能海）火鉢にて火をたき出せば木（古河）其間に米をしらぐ。火已に盛んに、ゆきひら已に其上に置かるるとき、初めて顔洗う。一人は其間室内を掃除するが例なり。井戸の水は濁れり。飯をかしぐにも顔をふにもこささるへからず。手盥はなし。栓杓にて水を汲み、之を手の平らに移して、それにて顔を洗う。はや二人とも我席に就く。飯はポコポコ煮へつつあり。石（能海）毎朝の例として、この折に「真宗の宝典」を巡読す。木（古河）は無法義。来てあれば其日の国民新聞を読む。やがて飯は出来る。二人は一の膳を中に置き、向い合い座す。あつき煮へ立てをも意とせず。すぐさま箸を取る。食い終り、茶も飲み、時間ハヤ迫り、木（古河）は勿々学校へと行く。

（4）昼

学校より帰り来るは一時頃なり。ハヤ石（能海）は昼飯かしぎ終りて我を待ち居る。又は独りたべつつある。又は尚かしき居る最中。又は已にたべ終りたる後、木（古河）毎日他力にて昼餐喫ふ。あな有難しあな有難し。

（5）午後

やがて石（能海）は学校へ行く。木（古河）独り留守して、今日の科業の復習、明日の下見などす。睡たさ寂しさ謂はんことなし。折々友人も来る。三時過ぎにもなれば、又々夕食の準備。今度は木（古河）の番なり。火は幸に昼の分の残れるあれば、之に炭を加えて火吹竹にて吹く。咄々無礼炭の飛んで眼に入る紛亂よ。又米しらぐ。それが為に水こす。時にはふた物提げて白豆腐買ひに行く。ハヤゆきひら火上にあり。ポコポコポコポコ。時計はなし。「モー何時頃ならん。扱ても石峯（能海）が帰りの遅さよ」。

（6）夕

既にして木石（古河・能海）は又膳の両側にあり、不平もあれども互いに忍びて無事にたべる。一寸此辺にて談話となる。時には忽ち大雲を起こし万龍を躍らして、口角飛沫、大議論となる。風呂に行くも此頃を例とし、成るべく同行せんとは二人の契約なり。日は暮れ。戸を閉つ。ランプ黙灯。大抵は之より連れ立ち明日の菜にとて、種々の珍味を三田本通、又は白金の志田町に買う。時に友人の下宿をつつき廻るもまた快なり。

（7）夜

あたりは静香かになりぬ。寺の方も己に睡りしならん。さりとして九時か、十時か、時計なければ少しもわからず。石（能海）の机は南に面し、木（古河）は東向して座す。或は読み、或は書く。所謂切磋琢磨は此折なり。ランプ二つあるなれども、何れも上ゲしんゆえか。暗さは云はんかたなし。天地凄然、鬼気入に迫り、やがて又眼の煩惱は我を包んで去る。臥床のべ、入る。大抵は枕頭書を読む。時にはランプを其儘に、我れ知らず寝入ることあり。ハヤ一方は麩の世となりぬ。灯を吹消す。そも何や我夢に入らん。

（8）休日

土曜日朝に必ず書院（龍源寺の下宿）を出て、其晩は大抵牛込の化堂（藤堂）の許に宿り、

それより日曜日の暮れ迄、牛込、神田、本郷など諸友の下宿に流連し廻るが木（古河）の癖なり。芝の方、如何にも殺風景にて面白くなく、自炊の苦しみは休日てと不適當と、腹の虫がきめてしまひし故にもやあらん。偶々四月三日、神武帝の祭日なるに家に籠りし事あり。空も長閑なり。上野あたりがさぞかし賑ひ居るなるべしなど、思い出では仲々氣も氣に非ず。此日は石（能海）も外出したり。其留守居のつらさ、毎週二里も離れたる神牛辺へ、雨でも風でも通いたるは矢張り之為かと分りては、毎々留守ささる。石（能海）に初めて氣の毒と思う氣起こり、何となく鬱々。

（9）買物

米は大抵一回に三升若しくは五升程づつ買ふ。之は云ふてやりさへすれば米屋より持って来て下さるなり。炭は自ら買ふて携へ来る事もあり。又炭屋の小僧に持って来さす事もあり。大抵一俵十三、四錢の安炭なり。菜と醤油とは多く夜買ひに行く。

（10）御馳走

最も多く黒豆を喫べたる様なり。其外は豆腐喰い、麩喰い、菜喰う。魚は終始喫はざりき。漬物とても別に跡口の為めたるべきには非ず。漬物の時は朝も昼も漬物ばかりのサイなり。漬物なき折は三日も四日も漬物なしに食ふ也。時々サイ無くて、ただ醤油を飯にかけたる事あり。卵も折々には食ひぬ。面倒なる時、財政の困難なる時、多忙なる時は飯の代りにパンを食う。無論バタとか何とか云う様な贅沢話でなく、ただ少しばかり白砂糖つけるがこの上もなき御馳走なりき。嗚呼まだあり、然り然り、時々海苔を菜したる事御座りき、記憶す。或時の海苔はたしかに十枚四厘の安物なりし事を、米も無論五等米よ。嗚呼かかる風。猶且山海の珍味よりも旨かりしとは、豊飲食上の一大問題に非ずや。豈三寸舌頭の一大疑獄に非ずやなど。洒落れたるも可笑し。

（11）炊

石（能海）はサスガに先進者なり。粥の如き飯、骨ある飯をたきし事は無けれど木（古河）に至りては凡てか様なるを、皆不機用、時々コゲ臭き飯たく事あり。或時は余り火を怒らせし為め、クワン一発「ゆきひら」は割れぬ。豆腐の煮様、豆のたき様に至りても、石（能海）もとより妙を得たりと云ふに非ず。然し乍ら木の不慣れなる事、石に劣る幾十等。毎々の失策。今思ふだに恥づかし。

（12）来客

梅原、弓削、久野、小黒の諸氏時々尋ねらる。之に対する餐応は凡て一盆の団子と定めてありき。（門前松下「名代松の餅」と書きしせる旗を屋頭に翻らせる家あり、所謂一盆の団子は乃ち此家より買ふ所の者）。

（13）木石主義 2月27日、木（古河）の日記に曰く

夜石峯（能海）と痔瘡切断の事より転々。或は牛の絶叫、或は鶏の首ねぢ、或は鯨の子思ひ、或は鹿の角突き、或は鱈の生焼など。色々動物屠戮の慘憺たる話に至る。兩個黙然、暫くして余大に感じて以為く。嗚呼哀れなる動物よ。吾々は之を救はざるべからず。他の学問議論。之に比すればまことに崑崙の前の小丘のみ。既に之を成就せば其時四海は方に大平安楽ならん。人間は方に大慈悲の者となるべし。而して之を成す事先づ肉食廃止より初めざるべからず。我々二人今宵正に大に感ず。幸に共に自炊し居る以て。今後、決して自ら好んで肉食せざるに決せば、庶幾くは此道に就くを得んと。のち之を石峯（能海）に談る。石峯（能海）大賛成。兩個絶叫、此千秋の大事を天に誓って立つ。

かかる事名けて木石（古河・能海）主義と云う。翌日之を香雪に、三月一日之を幸前、楢

村、杭畔、化堂の諸友談す。其後自炊上又肉食せず。

(14) ブツブツ

三月の二十日、木（古河）は石（能海）に一言しぬ。ソハ我れ飯を炊げるに足下何故火をたこさざりしかなどのブツブツなり。是も互いに一興なりしならん。今より思ふに可笑しさ限りなし。

23年2月19日に豊岡町の龍源寺、能海寛の下宿先へ古河勇が転宿同居する。
6月1日に三田寺町の西蓮寺へ転居。4か月間の同宿生活であったが、互に触発しあって自己の進む道を究めて行った。京都普通教校・反省会を通じての親友であった。

【能海寛の「春秋日記」から】

(明治21年)

10月14日 京都・普通教校でE.C.S(英文会)を興し、「New Buddhist(新仏教徒)」を発行する。会員47名。

※ 「New Buddhist(新仏教徒)」は、31号(10月27日)まで発行し、河野始治、前田得念に「英文会」委譲して、上京した。

(明治22年)

12月17日 友人の西依一六、松島静寿と3人で上京する。東京本郷区元町2丁目47番地白井花方へ下宿する。1月5日まで。梅原融は麻布区麻布町善福寺前、吉野は赤坂区へ下宿。

(明治23年)

1月2日 席料白米、茶、油、炭、月謝、筆紙、小使、火鉢、器、茶碗、盆、火鉢、小ブトン、雪平、箸、盆膳、油入れ合計4円47銭。書箱50銭。車代10銭。4円47銭。書箱50銭。車代10銭。

1月5日 朝より白井花方より荷を仕舞い、11時出発、芝区三田四国町二番地4号田中きん方へ転宿す。松島静寿、山中逸、能海寛、古河勇の4名。

1月7日 朝、双書を貰いに校（慶応義塾）に行き、後ち、弓削君の所へ散歩し談話して帰る。古河勇君来る。吉野静寿来る。晩、芝を散歩する。

1月8日 朝より青山錬兵場に行き元普生村上意興に逢う。離宮より大久保の碑を経て帰る。梅原融来る。古河当家に下宿する。竹下より葉書受く。古河と故普通教校以来の懐内を談し、彼の夢遊等面白きものを見聞せしを聞く。天蓮、石峯、焼寛、天頂山、洞達、石峰生。

1月10日 古河の文章力に触発され文章英知最も必要なこと益々感ず。学ぶべし。

1月11日 19日、元普通教生の青年会を立てることをなし、月一度集会をする様、古河君等尽力中なり。風呂へ行く。

1月12日 日曜日、故普通校を論ず。新文学寮を論ず。亜細亜の宝珠を論ず。海外宣教会を論ず。西本願寺を論ず。東本願寺を論ず。将来の仏教を論ず。真宗を論ず。英文会を論ず。新仏教徒を論ず。

1月13日 慶応義塾へ双書と履歴書を出す。入社金3円。国民の友を読む。古河と下宿先を探す。

- 1月14日 芝公園を散歩する。晩、古河転宿す。
- 1月18日 晩、古河、弓削君来る。日蓮伝記を読む。
- 1月19日 午後1時より築地で松山氏の日本仏教青年会設立へ故普生徒集まる。会者、今村、古河、弓削、吉野、藤本、戸田、橘、小原、良甫、吉住、菊池等。
- 1月25日 西依、山中、神田区に転宿。豊島君来る。午後3時より芝区三田豊岡町63番地龍源寺越溪宗逸方へ転居する。
- 1月27日 朝より藤堂哲と共に浅草に行き、蕎麦を食して公園を散歩する。午後、古河の元を訪ね書物を返し、談話中に弓削、松島君来る。
- 1月28日 法典論註上下終る。英文を以て主義とすべし。新島讓君は3、4日前死す。24日、晩古河君より聞く。佛家の政談演舌は不認可なり。
- 2月8日 朝、松島君は、神田屋の所へ移転す。当分は、この寺に居る。屋室三畳て50銭。実に寂しくかわる。吉野君一寸来る。藤堂よりハガキ受く。古河の宿へ行く。
- 2月14日 経緯会のこと種々談し、古河も近々来るべく言いし、自炊に大いに賛成す。
- 2月15日 弓削君来り共に梅原の所へ行き3人で九段の階行社開業式に行く。松島の所で吉野に出逢う。予は、晩食を藤堂の元でなす。8時に帰着す。
- 2月18日 大いに私立大教校を我が故郷に設立したき存念起こる。所は薬師山の南なり。普通科、高等科、別科等5名くらいの教員。午後、古河来り、明日移転。
- 2月19日 古河、予の元に転宿せり。パン食古河に於いてなす。
- 2月22日 朝パン、昨夜もパン。9時から作文。予、痔の気あることを今日知る。昼過ぎから銀座を経て両国橋を渡り深川、新橋を経て7時に帰着。終日パン食をなす。
- 3月8日 古河の「明治学院」を訪問する。
- 3月25日 古河勇の勤める明治学院で開催された文学会へ行き、講演や音楽を聞いた。
- 3月下旬 E. アーノルドを訪問(2回)自己の英文力を確かめる。二河白道を英訳。
- ※ 帰郷せば田舎にて、漢籍、仏学、英学、普通学、作文、東脩一円。大教場、小学生100人。普通学生(高等小学100人、高中学100人)、仏学生50人の構想を描く。(全寮制の小中高の一貫教育を考えていた)
- ※ 郷里の義父謙信から哲学館への転学の要請を受ける。
- 4月16日 『Wisdom and Mercy』 Vol.1 No.4で「二河白道の比喻」を英文翻訳。日本の布教、世界の布教(英文会)について書く。
- 6月1日 能海寛と桑門環は、三田寺町の西蓮寺(白山謙致)へ転宿する。
- 9月26日 仏書を英訳すること。
- 10月30日 『Wisdom and Mercy』 No. I を書く。
- 10月19日 清祥寺において仏教講演会が行われた。講演者は、大内精論、大内青巒、青次郎、佐治実然、「比較宗教の有用性」、「ユニテリアン宗教」など。
- 10月25日 慶応義塾において「土曜会」を組織した。会員数約30名(能海寛、白山謙致、梅原融、桑門環、吉野精順、菅学応、弓削俊澄など)、各宗派の僧侶が集まり、運動、スピーチ、作文等おこなう。
- 11月14日 『Wisdom and Mercy』 No. II を書く。
- 12月14日 『Wisdom and Mercy』 No. III を書く。

(明治24年)

- 1月11日 午後、藤堂を訪問する。古河、秦君に逢い談する。
1月15日 午前、哲学館に至り入館金月謝を収む。午後、藤堂、山中を訪問。
2月11日 紀元節。午後、古河、山中を訪問するも留守。藤堂を訪問中に山中来る。
2月15日 午前、藤堂、古河、予の3人、山中を訪問。彼は熱田温泉へ行く。
2月22日 山中へ反省雑誌を送る。藤堂、古河来る。晩、秦君来遊碁を打つ。

(明治25年)

- 3月23日 篠原君の調べで、出版条例を聞く。秦君に英文会のことを話すも賛意を得られず落胆。今日、宣教会、文学寮、内学院大学寮、高中、尋中へ英文会の件で書面を出す。4月8日に「新仏教徒」が誕生することを祈る。
4月8日 「釈尊降誕会」が誕生、慶応義塾演説館で行われる。(後の三田仏教会に発展)

(明治26年)

- 7月7日 哲学館高等科上級を修了する。大経「無量寿経」(梵文)の訳読が終り、記念に、子安、白山、能海の三人で記念写真を撮り、三枚人組の写真に、それぞれが自著して一枚ずつ分ける。

岐阜県安八郡澤渡村浄勝寺	斐川	子安善義
東京市芝区三田北寺町西蓮寺	沛南	白山謙致
島根県石見国那賀郡波佐村天頂山浄蓮寺	石峰	能海寛

明治念六年重七梵文大経讀了日寫之以為紀念并徵能海君別。

- 7月20日 朝、駒込峯岸を出て森岡に至り写真2回、一時間余。9時過発、車にて湯島に行く。松谷、菊池、大橋、村上、古河、西依など7、8名会し、松山来談。蔵行新法後り。午後1時、発鉄馬車にて、新橋馬車にて品川行。平松に行く。30分間談し、4時、横浜着。公園、海岸通り最壯快なり。

- 7月25日 四人で、6時発、熱田神社参拝、9時に東海運輸丸にて四日市に正午着。4時に二見着。茶話会あり、予の西藏行きにつき話す。古河、桜井、橘、原、山田、小山、加藤、10時退散。

- 8月30日 『世界に於ける佛教徒』の諸言を著わす。当初は、『新仏教徒論』とするも他人の勧告で変更する。『世界に於ける佛教徒』の序文を大内青巒氏が寄稿。

- 11月18日 『世界に於ける佛教徒』を哲学書院より発行する。

- 11月21日 内務省より、自著『世界に於ける仏教徒』の「版權登録之証」を取得する。

(明治27年)

- 1月1日 桑門、白山、平松、井円、小安、麦生、森岡、松田に葉書を出し、古河(同窓を込め)書面を出す。

- 1月3日 チベット探検に赴くために自らの考えを「口代」(遺書)に14項目を認める。

- 1月4日 東温讓君の追葬勤行をなす。

- 2月27日 剪髪を一掴み和紙に包み「口代」に添え置き、万一帰国出来ない場合は遺髪として葬送されたいと書き留める。



経緯会の成りあいについて能海の日記等で考察すると、明治23年1月19日、午後1時

より築地で松山氏の日本仏教青年会設立と普通教校出身者(今村恵猛、古河勇、弓削正雄、吉野精順、藤本教循、富山、橘大心、小原松千代、良浦、吉住、菊池謙讓、能海寛)によって、「経緯同盟会」が立ち上がった。

その後、弓削正雄、古河勇、能海寛らが頻繁に経緯会について討議している。明治27年12月に古河勇が中心となり経緯会(28名)が結成された。その後、古河の病氣療養により、北条太洋が代表を務めた。29年3月に上京した能海寛は、経緯会へ参画した。その北条も外交官として、30年6月18日、渡航した為、西依一六が代表を務めた。西依一六と能海が中心となり「経緯会」を「経緯同盟会」とし、会是、会員誓約書を作り、8月19日、白蓮社で経緯会会是委員会、続いて、臨時会を開催し、立て直しを図った。通称を「経緯会」とした。能海の記録によると会員41名である。

会員名は、北条太洋、正木新、杉村廣太郎、海野詮教、境野哲海、西依一六、田上為吉、菊池謙讓、小林正盛、月見覚了、渡辺海旭、山口力磨、柏原文太郎、古河勇、大久保格道、葦原雅亮、伊吹道暉、吉田友吉、本多澄雲、梶宝順、花田凌雲、梅原融、桜井義肇、菅学應、清川円誠、能海寛、田嶋擔、金義鑑、中島裁之、木山定生、菅真海、妻木直良、佐々木恵璋、梅田謙敬、旭野慧憲、重田友助、鈴木貞太郎、高楠順次郎、古田復之、安藤弘、大宮孝潤であった。

10月14日、帰省中の能海の元へ安藤弘よりの書簡で、「西依一六から突然の退会届が郵送されたことを知らせ、寛が不在で会も寂しき」と伝えてきた。

そして、能海は、婚約者と共に12月末に再び上京した。

明治31年3月4日、西依一六の送別会を開いた。能海は経緯会の運営を友人の境野哲海ら2名を指名して運営を委ねて、4月17日、開催の経緯会例会を最後に能海もチベット探検の準備と結婚式のため帰郷した。

明治31年11月に、能海がチベット探検に旅立ったあとは、経緯会は方向性を失い32年2月に解散と成り。高島米峰、渡辺海旭、安藤弘、境野黄洋、杉村縦横らによって、第二期・新仏教徒運動となる「仏教清徒同志会」へと伸展していった。

能海寛は、31年11月12日、神戸港から上海へ向かった。古河勇は、病魔に侵され32年11月15日に永眠した。能海は、34年4月18日、付け最後の音信により帰らぬ旅人となった。能海と古河の新仏教徒運動は互いの目的を半ばにして完成を見ることができなかつたのである。能海の日記を精査することによって、新仏教徒運動が解明される日が来るものと確信したい。

(2017.9.10)

【参考文献】

『能海寛著作集』第3巻「春秋日記」、「春秋ノ日記」、「春秋日録」

『能海寛著作集』第14巻「フィールドノート」

『青年文学』明治25年3月号「自炊」